

三河萬歲江戸に下り、才藏を備ふ、才藏は安房上總、又は下總古河の邊より出る、大夫才藏の巧拙をえらび、價を定て雇ひ、正月になりて出入の家々をまはりしなり、

〔守貞漫稿 二十六〕萬歲 今安政六年、近頃ハ四日市才藏市モ廢止ス、

〔八倫訓蒙圖彙 七〕鳥追 千町萬町の鳥追と、みづから名乗るなり、

〔俳諧歲時記 正月〕鳥追 元日より十五日に至り、田疇の鳥を追ふより起る歟、今は乞丐の婦女編笠を頂き、門々へ來り唄ふ也、

〔雍州府志 古蹟〕悲田寺 略 中 悲田院爲小兒之藥局 略 中 其後至乞兒爲病者寓茲、藥餌之事無幾而

絶、爲大人小兒乞丐之寓居、今專乞人會長居之、總謂與次郎、常造草鞋爲業而賣之、略 中 自元日至十

五日、著笠以白巾覆面、而敲手唱祝詞、倚門戶請米錢、是號敲與次郎、又稱鳥追、元民間出、自追拂田疇鳥之辭者也、

〔嬉遊笑覽 歌舞 五〕鳥追はもとより一種かゝるもの有しにあらす、千秋萬歲が士農工商の家に行、そ

れぞれの職分に付て祝詞をうたひし、其内にて田家のためにせしものなり、今江戸の鳥追は、非人の女房娘にて、常には淨るりなどをうたひ、三絃ひきて來る故、俗に女大夫と呼、あるまじき名

づけやうなり、この女共春毎に、衣服は木綿なれども、新らしきを著て、三四人ヅ、一組となり、三

絃胡弓ひきつれて、いとかしましく唄ひ來る、いつの程より玄かるにか、雍州府志悲田院の條に、略 中 是號敲與次郎、又稱鳥追、略 中 といひ、訓蒙圖彙にはたゞきとありて、注に鳥追と云り、何れも

かくあれば、敲といふが本名と聞ゆ、其圖は二人にて掌を扇にてたゞくさまなり、江戸の鳥追とはいたく異なり、古き鳥追のうたひものを、浪速人の注したるあり、青陽唱話といふ、多田義俊が鳥追の歌は、殿うつり物語に似たりといへるによりて、其事の似かよふををるせるよし、注の内

にみゆ、されど殿うつりは、この注者も予いまだみざる所、多田氏の僅に所々書置るを見るのみ